

5.20 いずれアヤメかカキツバタ

私の家の近くに四季の森公園と言うのがあるのですが、そのカキツバタや花菖蒲が見頃になりました。

カキツバタとアヤメ、花菖蒲、アイリス、この辺りの花は皆よく似ていて、関心がないと、どれがどれなのか区別がつかないですね。

特にカキツバタとアヤメは、「いずれアヤメかカキツバタ」という言葉があるように、外見からは区別が付きにくい例としてあげられているほどですから、ものの本を見ると、この二つの判別方法が書いてあることが多いですね。

下の写真、左がカキツバタ、右がアヤメ。



右のアヤメの花の紋様をみると、中心部に黄色と紫で網目紋様が見られます。

アヤメは、漢字で書くと「文目」。

これは「綾目」、つまり、縦糸と横糸が斜めに交差する紋様を表しています。

では、なぜ綾目と書かないのかと言えば、文目には、綾目と言う意味の他に、ものの筋道や区別という意味があるからです。

このことをよく表していると思われる好きな歌があります。

古今集の恋の歌の一番。

ほととぎす 鳴くや皐月の あやめ草 あやめも知らぬ 恋をするかな (古今 恋1)

この歌、(私の心は、美しく整ったあやめの花の紋様とは反対に、ものごとの道理もわからなくなってしまうほどの激しい恋に落ちてしまいました。)

と言う意味ですね。ほととぎすは、あやめと並んで、旧暦五月を代表する鳥です。

私は、この歌があるために、カキツバタ(杜若)より、アヤメ(文目)の方が好きなのです。

時代が下がって江戸時代、芭蕉は、陸奥の国に旅立ち、その旅行記兼句集である「奥の細道」が作られますが、その中に、アヤメを詠んだ句があります。

名取川渡りて仙台に入る アヤメふく日なり。

あやめ草 足に結ばん 草鞋の緒

(この日、名取川を渡って、仙台城下に入りました。家の軒端にアヤメを挿して、邪気を払う日のことです(旧暦5月4日)。

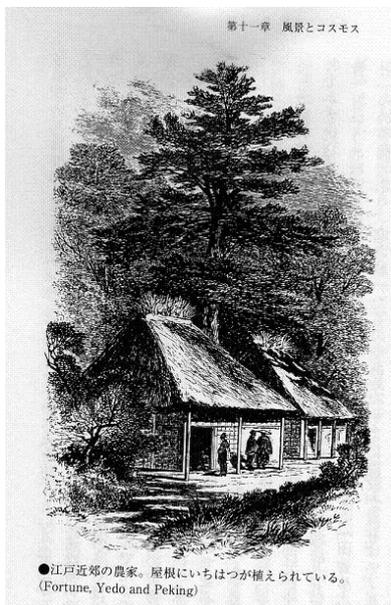
家にいれば、軒端にアヤメを飾るのですが、旅の空にいる私は、せめてアヤメを草鞋の緒に結んで、災いのこないのを祈るばかりです。)

ところで、江戸時代、民家の屋根が茅や藁で葺かれていたことは、皆さんご存じの通りですが、その上にアヤメが植えられていたことを知っておられる方は少ないのではないのでしょうか。

江戸末期、我が国を訪れた外国人の多くが、このことを指摘しているのですが、今では、その風習は無くなってしまっていますから、見ることもできないし、知る人もいなくなってしまったのですね。

彼らによって書かれた文章で読むと「屋根の上に青い百合が見られる」とされています。青い百合？

中には、その様子を絵に描いている者がいて、その絵から、この屋根の上に植えられているのは、百合ではなくて、アヤメの一種「いちはつ(鳶尾)」であることが分かります。少し不鮮明ですが、下の左の絵は彼らが描いたもので江戸郊外の農家の一つ。



屋根の上で育つ？

そうなのです。カキツバタが沼や湿地に咲くのにに対して、アヤメは乾いた土地に咲くので、屋根の上でも少しの土があれば育ったんですね。

花を見なくても、どこで育っているかを見れば二つを見分けることができます。

いちはつ(一初)は、アヤメの中で一番先に咲くものですが、京都では、鞍馬口の上御霊

(かみごりょう) 神社が有名です。

ちなみに、上御霊神社は、京都で最も古い神社の一つで、西暦 794 年、桓武天皇の創建にかかるものですが、この神社は、政争に敗れ、非業の死を遂げた貴族の魂を鎮めるために作られたもので、早良親王、橘逸勢などが祀られています。

明治維新で天皇陛下が東京に奠都するまで、天皇に親王が生まれると、祟りが降りかからないよう、この神社に参るのが慣例でした。

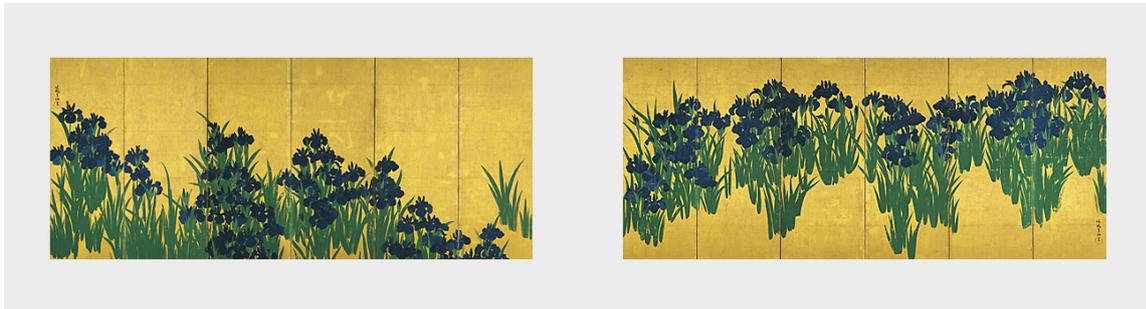
もともと、その甲斐もなく、まさにこの神社の境内で、応仁の乱が勃発したことも、よく知られている史実ですが。

5.21 カキツバタ

昨日の話では、カキツバタのことを書こうとして、なぜかアヤメの話になってしまいました。今日は、正真正銘カキツバタの話。

私思うに、アヤメは、一つ一つの花が非常に繊細で、美しく、単独で鑑賞に堪えるような気がするのですが、カキツバタの花は、一つ一つを見ると、地味な花のような気がします。でも、沼地の中に、一斉に花を開くと、なぜか華やかさのようなものがでてくるのですから不思議な花です。

昨年夏、根津美術館で琳派の美術展が開かれていましたので、青山学院に行った帰りに寄ってみたのですが、尾形光琳の国宝「燕子花図（カキツバタ屏風）」が展示されていて、かなりの人が出ていました。



この国宝の屏風、金と青のコントラストとカキツバタの構図が素晴らしく、簡素ながら豪華なのですが、近づいて見ると、版画を見ているようで、一つ一つの花からは、私は余り美しさを感じませんでした。

でも、どうして少し離れてみると美しいのか？

集合の美しさとも言うのでしょうか、この屏風絵は、やはりカキツバタの花の本質を捉えているような気がします。

京都で、カキツバタが有名なのは、上賀茂神社のお隣にある大田神社。

私は長くこの近くに住んでいたこともあって、この季節になると散歩がてらに見に行きました。この神社のカキツバタ群落は、天然記念物に指定されており、ちょうど今頃、見頃を迎えます。

大田神社は、「縁結び」の神様（天鈿女命 あめのうずめのみこと）を祀る神社。

神山（こうやま）や 大田の沢の かきつばた 深きたのみは 色に見ゆらむ

[拙訳]

（上賀茂神社の神様が降臨すると言われている神山の麓、大田神社の沢のかきつばたが咲きました。ここの神様にみんながお願いする恋の思いの切なさは、このかきつばたの深い青に表れているように思えるのです。）

これは、藤原の俊成の歌。

俊成の歌としては、ちょっと変わっているような気がします、ここでも、一つ一つの花の美しさに加えて、みんなの恋の思いが形をなしたカキツバタの集合の花としての美しさが詠われているような気がしています。

ところで、この尾形光琳の「燕子花図（カキツバタ屏風）」の元になっている在原業平の有名なカキツバタの歌は、伊勢物語九段「からころも」に出てきますが、誰でも高校生の頃に習って知っているこの歌は、「身をえうなきもの」と思いなした男が東くだりの途中、三河の国八橋で、カキツバタの五文字を句の上へすゑて旅の心を詠んだものとして知られています。

歌そのものは、それほど素晴らしく出来が良いとはお世辞にも言えないと思うのですが、ただ余りにも有名になりすぎて、評価を超越したところがあるんですね。

ところで、カキツバタという名前は、植物学者牧野富太郎博士の「植物記」によれば、古代、その花を布に擦りつけ染料として用いたことによると書かれています。

ここから、「搔きつけ花」或いは「書き付け花」と言われていたものが転化したようです。

かきつけはな→かきつはな→かきつはた ですね。

搔きつけるというのは、「摺りつける」という意味。ちなみに「はた」は「はな」の変異形です。

住吉（すみのえ）の 浅沢小野の かきつはた 衣に摺り付け 着む日 知らずも
（万葉集巻7-1361 詠み人知らず）

（住吉の浅沢小野に咲くカキツバタ。このカキツバタの花を私の衣に摺り染めにして着る日は いつくるのだろう。）

これは、自分の恋する女性をカキツバタにたとえ、自分と結婚できる日はいつのことやら、と嘆く歌ですね。

最後に、「かきつばた」は、漢字で「杜若」や「燕子花」と書かれるのですが、どちらも由来は中国の植物名をそのまま当てたものです。

しかし、杜若はヤブミョウガ、燕子花はキンポウゲ科の植物で、どちらもカキツバタとは全く関係がなく、今ではわが国に持ち込まれたときに間違っただけというのが、通説のようです。

でも、ここまで、流布してしまってからでは、もう訂正できないんですね。

この頃、政治屋さんのウソが横行していますが、明らかにウソと分かっているものも、そのままにしておけば、ホントになってしまうと言う例を、この花に見いだすのも、なんとも変な気持ちです。

5.23 いずれ菖蒲とひきぞわずらふ

ご承知の通り、平家物語には、沢山の魅力ある人物が登場します。

こういう世界に遊んでいると、時折、今の世の中には、ホントに魅力ある人間が少なくなつたなあ、と思ったりします。

登場人物の中で、誰が一番好きかということ友人達に聞いたりすることがあるのですが、人それぞれで、これはなかなか衆目一致するのは難しいようです。

が、逆に、嫌いな人物は？ と聞くと、「源頼朝」クンをあげる人が多いですね。どうしてでしょうかね。義経クン最良の反動ですかね。

ところで、その源氏一族の中で、保元・平治の動乱を通じ、常に「勝ち組」に属していた人物がいるのです。

その名は「源頼政」。

私、なぜか昔から、この人物気になるのですよ。

聞いたことがない？

まあ、そうかも知れませんね。

でも、この人物、当時の武士としては超一流、おまけに当代一流の和歌の名手。

と聞けば、へえー、どんな人物？ と興味を惹かれませんか？

詳しい話はいつかお話することがあろうかと思いますが、

この人、二度も天皇を悩ましていた「鶴(ぬえ)」退治をしたという記録があるのですね。

鶴って何？

今は想像上の生き物とされているのですが、昔の日本にはいたらしく、「頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の如きもの」とされています。



二度目の鶴退治のあと、彼は、帝から「御衣」をもらうのですが、その際、これを取り次いだ藤原公能から、

五月闇 名をあらわせる 今宵かな

と言われ、即座に、

黄昏時も 過ぎぬ と思ふに

と返し、その和歌の才能を絶賛されています。

この時、源頼政 60 歳。

もう、鶴退治で名を上げるには、歳をとりすぎたと思います。という意味ですね。

これは、一度目の鶴退治（頼政 50 歳）のとき、同様に、

ほととぎす 名をも 雲井にあぐるかな

と言われ、

弓張り月の いるにまかせて

（空に懸かっている弓張り月のとおりに、射たにすぎません。まぐれです。）

と答えたことを踏まえたものなのです。

平家の公達を遙かにしのぐ和歌の才能が見えますね。

ところで、この頼政、こともあろうに、鳥羽院の女官「菖蒲の前」に一目惚れをし、三年もの間文を送り続けるのですが、なんの応答もなし。

これを知った鳥羽院、からかい半分、頼政の心の内を試そうと、

5月5日(今だと6月下旬)の夕暮れに、「菖蒲の前」と彼女に似た女人二人に同じ姿をさせ、

「頼政よ 其中に忍申す菖蒲侍る也、朕占思召（おぼしめす）女也、有御免ぞ、相具して罷出よ」（源平盛衰記）と頼政に言うのです。

（このなかにおまえが心を寄せている菖蒲の前がいる。彼女を選んで一緒に連れて行きなさい）

頼政、自分の惚れた「菖蒲の前」を間違えるはずもないのですが、

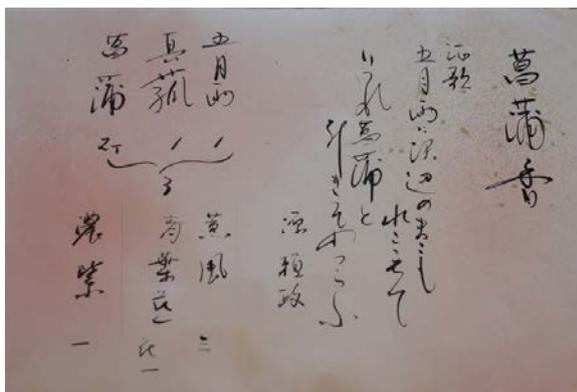
五月雨に 沢辺の菰(まこも) 水こえて いずれ菖蒲と 引きぞわずらふ

と答えるのです。

つまり、(今日の五月雨のせいで、水かさが増して、沢辺に生えている葉が 菖蒲か真菰か私にはわからなくなってしまいました。)

これに心うたれた鳥羽院、強く反省して、頼政と菖蒲の前の仲を認めたのです。

これは、この季節、「夏の組香」として行われている「菖蒲香」の由来ともなっています。



京都勤務時代、聞香に誘われておっかなびっくり出かけていった時に、教わった懐かしい思い出です。

試し香は五月雨と真菰。本香は6つ。この中の一つが菖蒲（これだけは試し香では聞かされていないのです）。

順に、出された香を嗅いでいって（嗅ぐことを聞くと言うのですが）、この中から、「菖蒲」を聞き分けるのです。

結果？

もちろん、いずれ菖蒲と引きぞわずらふ、でした。

5.28 五月雨

一年中で最も爽やかな季節である五月も、残るところあと数日になりました。

天気予報では、これからしばらくは雨。

走り梅雨ですね。迎え梅雨と呼ばれることもあります。

この時期は、気温が急に低下することがあり、体調に変調を来す人が多い頃です。

ところで、五月という月ほど、今と昔のイメージがかけ離れている月はないと、私は思います。

新暦の五月は、明るく青い空に新緑が映える中を爽やかな風が吹き通っていくイメージであるのに対して、旧暦の五月は、毎日曇った空から降ってくる陰鬱な雨とじっとりとした重たい空気のため息をつくというイメージがあるように、まるで正反対。

五月という言葉は、非常に古くから使われている言葉で、日本書紀などでは「五月」と書いて「さつき」と読ませており、「さ」だけで田植えを意味していました。

五月（さつき）という言葉は、早苗月（さなえつき）を略したとも言われていますように、旧暦5月は、早苗を植える月、田植え月でした。

一方、五月の雨、「さみだれ」という言葉は、「さ」は田植えの時期、「みだれ」は「水垂れ」すなわち雨、という二つの意味を持つ言葉が合体してできたものです。

五月雨が、梅雨の別名であることはご存じの通りですが、この言葉は、五月という言葉より少し新しく、万葉集には登場せず、平安時代になって、古今集、千載集などに、初めて登場してきます。

五月雨（さみだれ）の続くうっとうしい日々の空には、五月雲（さつきぐも）とよばれる厚い雲が垂れ込め、夜も五月闇（さつきやみ）といわれる暗い闇夜が続きます。

源氏物語には、有名な「雨の夜の品定め」という段がありますが（箒木）、これも、若い貴族達が、外に出られぬ鬱屈を晴らす為に、梅雨の長雨（ながめ）の時間つぶしとして、美しいと評判の女性達の噂話をするところから始まるのです。

このような日が続く中で、稀に、待ち焦がれた晴れ間がでることがある、これが本来の五月晴れですね。

さみだれは もの思ふことぞ まさりける ながめの中に ながめくれつつ

（和泉式部集）

このように、五月或いは五月雨は、人にいろいろとものを思わせるところがあるようで、結構、歌に詠まれたりもしているのですが、新暦の五月の中で過ごしている私たちには、頭の中では理解していても、どうしても明るいイメージがつきまとして、歌の印象を取り

違えてしまうということがあるようです。

天正10年5月28日（西暦1582年6月18日）、本能寺の変を前にして、明智光秀クンは、迷う心を抱えて、愛宕山に登り、**里村紹巴**らとともに連歌の会（愛宕百韻）を催しますが、そのときに光秀クンが詠んだ発句は、よく知られています。

ときは今 雨がしたしる 五月かな [とき（土岐）は今 天が下知る 五月かな]

この句のうち、「したしる」の部分については、本来「したなる」だったものが改竄されたという**紹巴**の証言もあるミステリアスなものですが、次に続く「水上まさる庭のまつやま」を見る限り、素直に「戦勝祈願」の発句として詠まれたと考える方が適切ですね。

それに、本能寺の変まで3日もあり、奉納連歌で公開されることもあって、信長クンに知られる可能性が高いものでしたし、私なら、決心していたら怪しまれるようなことはしませんね。

でもこれでは、歴史秘話ヒストリアにはなりませんけどね。

戦国時代の五月雨の歌としてもう一首。

五月雨は 露か涙か ほととぎす 我が名をあげよ 雲の上まで

これは、室町幕府第13代将軍の足利義輝の辞世の句とされています。

ほととぎすは、無念の涙をのんで亡くなった者の生まれ変わりと考えられており、その無念の思いを亡くなった者に代わって語り継ぐとされています。

ご存じのように、剣豪でもあった足利義輝将軍は、時に京で権勢を誇っていた三好・松永勢の不意打ちを受けて、数少ない味方と共に奮戦、多くの敵を斬り倒したうえ、倒れるのです。

この歌は、その無念をほととぎすに託して、五月雲の上にある晴れた空高く、自分の名をあげ、語り継いでほしいという悲痛な思いを詠ったものです。

東北も、まもなく梅雨入り。

この時期になると、私は、次の句を思い出します。東北にこれ以上の不幸がありませんように。

五月雨や 名も無き川の おそろしき 蕪村
五月雨や 大河を前に 家二軒 蕪村
五月雨を 集めて早し 最上川 芭蕉

6.3 唐傘

今、我が家には二人しかいないのですが、傘が異常に多いのです。
皆さんのお家ではどうですか？

私の傘は、いわゆる「蝙蝠傘」が4本。うち1本は暴風雨用のもので、骨が多く、大きさが通常のもの1.5倍位。余り差す機会がありませんが、ちょっとした台風程度の雨くらいだと全く濡れません。ゴルフをされる方は、ゴルフ場でプロゴルファーの方が差している派手な傘の普段用と思ってください。残る3本は、普通サイズの蝙蝠傘。色が、黒、青、グレーと違っていますが、このうち1本は、子供たちから還暦のお祝いにといただいた皇室御用達の傘屋さんのもの。勿体なくてまださしたことがありません。

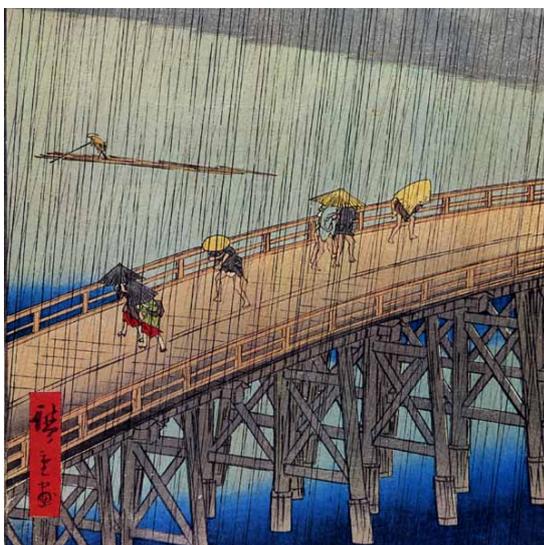
折りたたみ傘は全部で4本。自分で買ったものは1本のみで、後は貰ったもの。軽くて、短い3段折りたたみ傘は、天気予報に関係なく外出の時には持って行きます。白いビニール傘は使いません。雨でも、向こう側が見えて便利なようですが。

家内の傘は勘定できないくらい多くて、日傘を含めると数十本ある。
フィリピンのイメルダ夫人の靴ではないのですが、なぜこんなにあるのか私には理解出来ません。でも、聞くと災難が降りかかると確信していますから、そのような愚かなことはしません。

ところで、わが国に傘が登場するのは、欽明天皇(539～571年)の時代。仏教の儀式の道具として、唐から百済を経て伝わったもののようで、最初から「唐傘(からかさ)」と呼ばれていました。

雨用として使われるようになったのは、室町時代からで、これは紙に油を塗ることで防水性が実現されてからです。

庶民が一般的に使うようになったのは、なんと言っても江戸時代からで、安藤広重の「大川橋あたけの夕立」の浮世絵でも、傘を差して急ぎ足の江戸庶民の姿が描かれていますね。



しかし、この唐傘、結構高かったんですね。

高級な蛇の目だと今のお金に直しても1万円を越えていますし、いわゆる番傘でも3000円くらいしたようです。耐用年数は、丁寧に使って2~3年。だから、傘も決して使い捨てではなかったのですね。

現在でも、うちの周りでは傘の修繕の車が回ってきますが、当時も古くなった傘の回収は立派な商売で、回収した傘は、貼り替えられて、リサイクルされたのです。

よく時代劇で、尾羽うち枯らした浪人さんが傘貼りの内職をしています。あれは、殆どがリサイクル傘なのです。

ときどき、考証のよくない時代劇を見ていると、新品に見える傘の骨に、糊を付けて柿渋が塗られた油紙を貼っているシーンが見られますが、新品の高い傘は、貼るのに技術を要するから浪人さんには余り回ってこなかったみたいですよ。



傘を粗末にして、リサイクルをしないで捨てたりすると、一つ目に一本足、赤い大きな舌という姿の「からかさ小僧」が化けて出てきます。



これは、傘を大切にしましょうということを庶民や子供に教えるために作られた人為的なお化けで、人間に害を与えることはなく、誰も目にしたことがないというお化けです。民間伝承では「からかさ小僧」は、登場しないのです。まあ、架空のお化けですね。

え、お化けはみな架空じゃないのかって？
ま、そう言ってしまえばそうなのですがね。

ヨーロッパでは、18世紀までは、傘は贅沢品で、富と権力の象徴でした。よくイギリスでは、紳士が固く巻いた傘を持って歩いている図が出てきますが、もともと雨の日に傘を差す習慣がなかったヨーロッパでは、雨の日は濡れて歩き、日差しがきつい日に日傘として使用するのが普通でした。

なお、17 世紀のパリなどでは、傘は、建物の上から投げ捨てられる汚物・糞尿を防御するものとして使われていたようで、貴族やお金持ちの女性の必需品。やはり雨の日には使わなかったようです。

そこに行くと、日本は、傘の先進国で、日傘として使うだけでなく、15 世紀には雨用に傘を使い、17 世紀には、庶民が雨傘を使っていたのですから、スゴイと思います。

なお、唐傘よりも蓑笠が一般的ではなかったかという点については、確かに唐傘が高価だったことありますが、両手を使って、雨の中でも作業をする必要があるかどうかで、使い分けていたようです。

濡れるしかなかったヨーロッパなんて、つい最近まで、まあ、風雅とは縁のない野蛮な国だったんですね。

6.10 入梅

私の住んでいる横浜でも、昨日6月9日に、梅雨入りが発表になりました。
そして、今日6月10日は、暦の上での雑節の一つ「入梅（にゅうばい）」。

今どき、暦の上での入梅など、誰も見向きもしませんが、旨いものには滅法弱い私、入梅を迎えると、さあ、いよいよ「鰯」の季節だよーと脂の乗った鰯の光り輝く身を反射的に思い出しますので(入梅鰯)、入梅は、私にとって大切な雑節の一つです。



昨日、横浜は、一日中朝から冷たい雨が降り続いて、気温も20度しかなく、寒かったです。
今年の梅雨は、スタートから「梅雨寒」ですね。
こんな時、新鮮な鰯のつみれで、ちょっとだけお酒を飲むのも良いですねえ。

ところが、今日は、一転して「梅雨晴」、気温も昨日より7度も高い27度が予想されています。この頃の気温の変動は、対応が大変で、こまめに服装を変えなければ体調を崩しそうです。厄介な季節です。

ところで、新暦6月から7月にかけて、雨が降り続くこの現象は、日本、台湾、韓国、中国の長江下流部の揚子江流域に特有のもので、東シナ海を取り巻く東アジアの国々に共通に見られるようです。

さて、「梅雨」という言葉は、ちょうどこの頃が梅の実が熟す時期だからという説と湿度が高いためカビが生じやすいので黴の雨、つまり黴雨（ばいう）と呼ばれたことに起因するという説などがあるのですが、実は、あまりよくわかっていないようです。

いずれにせよ、「梅雨」という言葉は、中国から我が国に輸入された外来語ですし、日本で使われ始めたのは江戸時代。

それより前には、この言葉は、我が国の書物には登場しません。

いかにも古い言葉のように見えて、比較的新しい言葉ですので、日本での使い方や意味を

調べてもどうにもなりません。

ものの本によりますと、梅雨という言葉の母国である中国の揚子江流域では、梅の実の熟す頃に長雨が続くのを梅雨（メイユ）と呼んでいたそうです。

では、わが国では、昔は梅雨をなんと言っていたか。
梅雨という言葉が入ってくるまで、我が国で使われていたのは「五月雨」。

例えば、赤染衛門の次の歌などは有名ですね。

五月雨の 空だに澄める 月かげに 涙のあめは 晴るる間もなし

[拙訳]

(五月雨の空でさえ、たまには晴れて澄んだ月が見えることがあるのに、私の涙の雨は、心が晴れる時もないほどなのです。)

以前挙げたことのある室町幕府13代将軍の足利義輝の辞世の歌。
剣豪として謳われていた義輝将軍は、当時京で勢力をふるっていた三好・松永の軍勢に襲われ、孤軍奮闘、自ら剣をとって奮戦した後に倒れるのです。

五月雨は 露か涙か ほととぎす 我が名をあげよ 雲の上まで

ほととぎすは、無念の涙をのんで亡くなった者の生まれ変わりと言われており、その無念の思いを亡くなった者に代わって語り継ぐと言われていています。

[拙訳]

(ほととぎすよ、無念の五月雨を降らしている雲を突き抜けて、空高く揚がり、自分が正々堂々戦ったということを世の皆に知らせて欲しい) そういう意味ですね。

日本で作られた自然に関する言葉は、我が国ならではの繊細な感じが漂っていることが多いのです。

この「さみだれ」という言葉も、その背後に、僅かなころの「さ乱れ」を感じさせる美しい言葉だと思います。

翻って、梅雨という言葉を見ると、その雰囲気が少ないような気がするのは、私だけでしょうか？

食用の梅の実の熟れる時期に降る雨、なんて実利的な雰囲気の言葉からは、いかにも中国伝来の言葉という気がします。

というわけでもないのですが、
梅雨を詠んだ句で、私が良いなと思えるのは、明治に入ってからですね。
例えば、正岡子規が詠んだ次の句です。

刈り残す 二畝の麦や 梅雨に入る

今でも、梅雨の雨のことを「麦雨（ばくう）」ということがあります。
もう一つ子規の句。

長靴の たけに余るや 梅雨の泥

昔、私たちの周りにあった泥道も、最近は少なくなりました。

6.30 水無月

今日、6月30日は、夏越の祓（なごしのはらえ）の日。
年越しの祓と並んで、年に2回ある大祓の一つですね。

我が家の近くの神社でも一月ほど前から祓の行事をするって看板が出ていましたから、関西に限らず、関東でも神社の年中行事になっているようです。

茅で作った輪の中を8の字を書くように3回くぐると、身についた穢れがとれるという言い伝えがあるので、何はともあれ、暑い夏を無事越せるように、行ってきます。
これ、左回りからと決まっていますので、間違えても右回りしないように。
うっかり間違えると、他人の穢れまで付いてきちゃうかもしれませんよ。



この祓、本来は神事ですから、元々は、大宝律令（701年）で定められて公式の宮中行事として行われ、国民に代わって、世の穢れを落とすものだったようなのですが、次第に、時代が下って、平安時代になると、民間でも行われるようになっていたようです。

神社の宣伝パンフには、

水無月の 夏越の祓 する人は 千歳の命 伸ぶというなり
という歌がのっていますけど、これは、拾遺和歌集にある、読み人知らずの歌。
今の世の中、そんなに長生きされても困るんですがね。

京都では、下鴨神社や上賀茂神社の夏越祓が有名です。

昔のことでうる覚えですが、たしか、夜に、人の穢れを移した紙の人形（ひとがた）を奈良の小川に流すんですね。

出かけて行って、自分の名前を書いて、50円か100円払うと、その人形が身代わりになって私の穢れを持っていてくれるというわけです。

なんとなく、陰陽師安倍清明の世界みたいで、いいでしょう。

まあ、しかし、そういう神事は横に置いて、なんといっても、今日は、「水無月」を食べる日ですね。

え、水無月って、お菓子のこと？

そうそう、少し冷やした水無月は、夏越の祓の日のためのお菓子。

これを食べてはじめて、身体の中から穢れというか、悪魔というか、邪悪なものが出て行ったという実感が伴います。

いや、ホントは、単に食べたいだけ。
これが、素朴なんです、なかなか美味しいんです。



ベースは、白い外郎（ういろう）。その上に、小豆が乗っているだけのものなんです、千年の都の伝統のお菓子。

小豆は、悪霊祓いの機能を果たし、下の外郎は昔の貴族が夏に食べた氷室の氷を表しているといわれています。

まあ、冷静に考えると、夏に食べる「氷アズキ」の代用品ですね。
庶民は、つい最近まで、氷が手に入らなかったから、氷に代えて白い外郎ということです。

ところがね、この水無月、夏越祓をするくせに、こちらの方の和菓子店には、6月30日に売っていないのです。

これ、片手落ちというか、肝心要めのところが欠けているというか、まるで餡コの入っていない鯛焼きみたいな感じなんですね。

ところで、お菓子でない方の「水無月」、旧暦の六月のことだということは誰でも知っていると思いますが、「無」は「な」の当て字。
水か無いという意味ではありません。

「な」は、後置詞で、今の言葉に直すと、「の」という意味です。
神無月の「無」も同じです。

どこかの誰か、きっと長屋の大家さんが、八つあん、熊さんに、神様はみんな出雲にお出かけで、ここにはいないから神無月ってえゆうんだよ。な～んて、落語にだまされてはいけません。

この「な」は、古代から使われている由緒正しい「な」で、まなざし、みなと、たなごころといった優雅な言葉に残っています。

「ま（目）」＋「な」＋「さし（差し）」

「み（水）」＋「な」＋「と（門）」

「た（手）」＋「な」＋「こころ（心）」

ですから、水無月も、

「み（水）」＋「な」＋「つき」で、田に水が一杯張られていて、稲がすくすくと成長する月を表した言葉なんですね。

6.18 蛙（かはづ）と蛙（かえる）

先日、以前に泊まったことのある信州のK温泉の宿屋さんから葉書が来て、「近くの川で蛙が鳴き始めました、ここを癒しにお出でになりませんか」という気持ちがぐらっと来る一言。

こういうの弱いんですね。

我が家の周りは、住宅地を雑木林と畠が取り巻いていて、今は遠くで鶯が、近くではホトトギスなんかは鳴いているけれど、田圃がないので、蛙の声は聞こえません。

ところで、K温泉の蛙は、蛙は蛙でもカジカ蛙。

ケロケロでも、ゲロゲロでも、ブーブウでもありません。

河鹿（カジカ）蛙は、鳥の声か虫の声かと間違ふほどの美しさ。

聞いたことがあります？

ビーヨピヨピヨ？ コーロコロコロ？ ホーロホロホロ？ をミックスしたような声ですね。



ところで、河鹿という以上、鹿の声に似てるのかと言われれば、似ているような違うような、ビミョーですね。

不思議なことにあれだけ沢山いる奈良公園で、私は鹿の鳴き声を聞いたことがないのだけれど、昔、一度、山の中でトレッキングをしているときに、ピーョ、ピー、ピーョという声が出て、あれ何？って聞いたら、鹿だと教えて貰ったことがあります。

そういえば、

奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の 声聞くときぞ 秋は悲しき

という歌があるように、鹿の声は河鹿に比べて悲しい声のような気がしますね。

ところで、古歌の世界では、カエルを「かはづ」と書くと「河鹿蛙」のことが多くて、ゲロゲロ蛙をイメージすると間違ってしまうことがあります。

三点セットで出てくると間違いなく河鹿蛙。

え、三点セットって何？って

これは、「かはづ」「山吹」「いで」。

例えば、古今集の次の歌。

かはづなく ゐでの山吹 ちりにけり 花のさかりに あはましものを (よみ人しらず)

「ゐで」というのは、今の京都府綴喜郡井手町。
昔から、木津川の支流「玉川」に棲む「河鹿蛙」と山吹で知られています。

蛇足ですが、

「花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの いづれかうたをよまざりける」

という紀貫之が書いた有名な古今和歌集の仮名序の中で出てくる、この「かはづ」も河鹿蛙なんですね。「ゲロゲロ」と「ホーホケキョ」を同じ「うた」と聞くのはちょっと難しいですもんね。

さて、ゲロゲロカエルの方は、古歌に登場しないかと言え、そうでもなくて、「田」と一緒に出てくると、ゲロゲロカエルの場合が多いんですね。

葦引きの 山田のそほづ うちわびて ひとりかへるの 音をぞ泣きぬる (後選集 806, 恋四,)

この歌、恋しい女性に振られて、トボトボと泣きながら、ひとり家に帰る自分を田んぼの中に一人ポツンと立っている案山子になぞらえているのですが、女性に振られて蛙のように泣くというのは情けない。

さて、この蛙クンの世界では、今、「ツボカビ病」という感染症が大流行中。
感染症にかかるのは、トリや豚だけではないようです。
蛙は、皮膚で呼吸するので、皮膚呼吸ができなくなるツボカビ病は蛙にとって致命的なんですね。

そのうち、蛙の声を聞こうと思ってもいなくなるかも、というのは大げさだけれど、食用蛙の数が減って、値段が高くなるのは勘弁して欲しいですね。

ところで、この食用蛙、フランス料理に出てくるのは、「ヨーロッパ殿様蛙」という種類。
日本で食べられているのは、アカガエル科の「ウシ蛙」
中華料理では、「トラフ蛙」
みな種類が違うのですよ。

食べたことがあります？

え、どこ食べるのか？って

後ろ足です。

味は、私には鶏のささみ肉と同じように思えますね。



ちなみにトラフ蛙は、中国語で「水鶏」、アカガエルは、中国では「田鶏」
中国人は、鶏の代わりに食べてるんですかね。

あれっ、またいつの間にか、食べ物話になってしまいました。すみません。